

先史・古代社会の遠隔地交渉に関する人類史的総合研究  
Comprehensive research of human history concerning  
long-distance interactions in prehistoric and ancient societies



上村 俊雄 (Kamimura Toshio)  
鹿児島国際大学・国際文化学部・教授

研究の概要

先史・古代の遠隔地交渉の実態および社会的役割・メカニズム等について、考古学や文化財科学（考古科学）的方法などを用いて、実証的かつ理論的に解明するとともに、その人類社会における意義について考察を及ぼす。

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学，文化人類学，文化財科学，蛍光X線分析，遠隔地交渉

1. 研究開始当初の背景・動機

日本考古学は、型式学や緻密な発掘は行われているが、考古科学的手法の積極的使用や、海外への成果の公開・貢献には、あまり積極的ではなかった。こうした中、考古学者自らが学際研究に努める必要がある。加えて、日本で行われている蛍光X線分析による土器の産地推定は世界的にみても極めて大きな成果を挙げているが、分析できる所が限られていることと、将来的に安定した分析ができるよう、同分析の拠点を設ける必要があると考えた。

2. 研究の目的

- 1) 「海」と「遠隔地交渉」を鍵とする新たな研究分野を開拓し、
- 2) 縄文時代後晩期社会及び弥生社会などを新視点から再検討し、社会の階層化・複雑化の実態を明らかにし、
- 3) ヨーロッパ、アジア、太平洋地域等の学際的分野の諸研究と比較しながら、
- 4) 土器の観察と胎土分析などの文化財科学的方法や最新・最善の調査法を積極的に導入した研究から、
- 5) 遠隔地交渉が社会の発展にどのような役割を果たしたかを実証的に解明する。

以上から遠隔地交渉から社会の発展を説明し、既研究にはなかった新たな視点を提示する。さらに遠隔地交渉の役割に関する高次の人類史的理論の構築に寄与する。

3. 研究の方法

①文献および資料収集，②発掘調査，③蛍光X線分析装置等を用いた土器の分析という3つの柱で本研究を推進する。そのために、完全自動式の蛍光X線分析装置を導入し、正確かつ安定的な測定を行った。また、日本列島とその周辺、アジア、太平洋（フィジー）、ヨーロッパでの現地調査も行った。

4. 研究の主な成果

蛍光X線分析による胎土分析では、弥生土器を中心とする軟質系土器の分析にも拡張し、短期間に非常に多くの試料の分析を行うことに成功した。軟質系土器に対する分析法を確立し、対象を格段に広げることができた。九州・南西諸島をはじめ、各地の土器の化学特性を把握し、海外ではフィジーやタイでも同様の分析を実施することで、遠隔地交渉を考察しうるデータを得た。

実証レベルでの大きな進展として、土器の移動について形態的類似性のみを頼った解釈の不正確さを、胎土分析から指摘できた。これは土器の地域間比較にあたり胎土や統計解析に基づくことの重要性を物語っており、従来の考古学的議論の危うさに警鐘を鳴らすとともに、考古科学的分析を総合した検討が必要であることを内外に明示することになった。

弥生時代において、北部九州と沖縄諸島との間での遠隔地交渉の重要な鍵を握る2つの重要遺跡、西北九州五島列島の宇久松原遺跡と薩摩半島西部の高橋遺跡の発掘調

査を実施し、両遺跡で墓地を確認した。北部九州と南西諸島との遠隔地交渉の仲介者としての役割を果たした地域といえる。調査からそれを高度に実証することができた。発掘調査は慎重かつ計画的に進め、宇久松原遺跡で初めて石棺墓の墓壙や追・再葬を示す土層の痕跡を確認することに成功した。弥生時代の石棺で二次的埋葬の痕跡を土層から証明したのは、これが初例と考える。北部九州等とは異なる埋葬風習を「行為」のレベルで実証的に復元することができた。また、遠隔地交渉の中継拠点と考えられる薩摩半島西部の高橋遺跡では、北部九州と比肩できる定型化した木棺墓群を発見したが、本遺跡とその周辺の特異性を十分に物語るものといえる。

南西諸島との交渉が開始される縄文-弥生転換期についても、次のような考察を経て理解が進んだ。

我々は「遠隔地交渉」を少なくとも5万年前以来の人類普遍の現象とみなし、遠隔地交渉を、①通常は食物以外の、②物質文化に象徴的意味が付与され、③生命維持戦略としてのヒトの生物学的基盤に基づき、④交渉の範囲が「日常的接触範囲」を超える（象徴的距離含む）ものとして包括的に定義した。そして、考古学的・歴史的・民族誌的な事例から遠隔地交渉のパターン分けを行い、その意味を考察した。そして、故郷表示型→（ディアスポラ型）→異界交渉型→国家的外交の大きく4類型に分類することに成功した。進化論的に順次出現したとみなすことができ、連続的で細分可能であるが、新しい形態の出現後もより古い形態は残存する（性質の異なるシステムが関与しており、認知システムは相互に矛盾する知識でさえ互いに関連するスキーマ群として保持できるからである）。

これらの説明については、ヒトの認知的基盤の進化と性格を十分考慮に入れることで説得力を持たせることができた。遠隔地からの物資や情報に高価値を見出す傾向は、超自然的存在に対する信念と同じくらい、後期ホモ・サピエンスに特有の認知傾向であると考えられ、遠隔地交渉は、ホモ・サピエンスの認知能力に基づく、優れて現代人的行為と位置づけた。そして、後期ホモ・サピエンスの社会の複雑化（価値の生成システムの変化、経済・政治システムの変化）につれて、遠隔地交渉の新しいパターンが加わっていくと考えるに至ったのである。

こうして、遠隔地交渉に視点をずえることにより、従来の発展段階論的な「時代区分」とは異なる基準による歴史叙述が可能になってくることを、当初の目的以上に明確に示すことができた。

## 5. 得られた成果の世界・日本における位置づけとインパクト

発掘調査で証明したように、精緻な調査を埋葬「行為」レベルでとらえたこと、認知考古学の理論の実践は、世界的にみても高度なものである。蛍光X線分析による胎土分析など、考古科学的手法を考古学者が実施するという哲学で実践したことも、考古科学本来のあり方を再認識させるものといえる。日本考古学をベースとしてその長所を生かしつつ、新しい理論や方法に精力的に取り組んだことで、世界に通用するものといえる。また、遠隔地交渉の理論化においては、遠隔地交渉と、科学のグランドセオリーといえる進化論とを結びつけることにより、遠隔地交渉のあり方をパターン化することに成功した。本研究の重要な核は世界標準以上に達しているのではないかと思われる。

## 6. 主な発表論文

（研究代表者は太字、研究分担者には下線）  
**Naoko Matsumoto**, in press *Figurines, Circular Settlements and Jomon Worldviews Structured Worlds: The Archaeology of Hunter-Gatherer Thought and Action*. *Approaches to Anthropological Archaeology*. Equinox.

中園聡・松本直子編 2008 『長崎県 宇久松原遺跡の学術調査—五島列島宇久島に所在する弥生時代埋葬遺跡—』、鹿児島国際大学考古学研究室 総頁数 86 頁

中園聡編 2008 『鹿児島県 高橋遺跡の学術調査—薩摩半島西部に所在する弥生時代墓地—』、鹿児島国際大学考古学研究室 総頁数 40 頁

上村俊雄 2008 「北陸・南九州・南島間の遠隔地交渉について」『人類史研究』14 pp29-41

三辻利一 2008 「新しい土器の考古学」『人類史研究』14 pp111-126

三辻利一 2007 「牛頸窯群、天観寺窯群、伊藤田窯群の須恵器の化学特性」『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』4 pp1-8

松本直子 2006 「縄文イデオロギーと物質文化」『心と形の考古学』小杉康編 同成社 pp79-100

中園聡 2006 「佐賀県柚比遺跡群出土弥生土器の胎土分析」『国際文化学部論集』7 (2) pp73-113

大西智和 2006 「地下式横穴墓から出土する須恵器と土師器」『Archaeology from the South』 pp127-134

ホームページ等

<http://www.iuk.ac.jp/~koukogaku/>